

ペヘレイ *Odonthestes bonariensis* の汽水による 高密度飼育試験(予報)

村 山 隆 夫・西 原 隆 通^{*}
石 崎 博 美・小 山 定 久

ペヘレイは、昭和41年神奈川県が我が国で初めてアルゼンチンから移殖し、以来、ふ化採卵に成功し現在に至っているが、現在行っている淡水による止水式種苗生産方式では、飼育水1 m^3 当りの生産尾数が100～200尾程度が限度である。このため、より以上の高密度飼育を可能とならしむること、また、現在当場で行っている汽水循環濾過によるアユの高密度飼育方式の応用あるいは、同施設の閉間期である5～9月の高度利用等を図る目的でこの試験を行った。

詳細については、次号で報告するが、本報では、その概要について述べる。

ペヘレイふ化仔魚の塩分に対する抵抗性については、すでに前報で報告したとおり、塩素量1.66～10.34‰の範囲で、淡水のみの場合より高い生残率を示すことが、すでに判明している。

試験は、現在、当場で行っている海水混合による汽水循環濾過によるアユの種苗生産方式に準じて行った。

試験中の塩素量は、海水の混合により約3.5‰に調整し0.2～0.5 ℓ /sec程度注水し試験を行った。試験期間中の水温は、20.0～21.0℃で、飼育餌料としては、シオミズツボワムシ、ブラインシュリンプ、アユ用配合餌料を使用した。

試験池は、ビニールハウス内の飼育池(池水量6.7 m^3)を用い、ふ化後3～5日目の仔魚を10,000～30,000尾放養し、55～85日間の飼育を行った。

試験期間中の生残率は、40～60%で、淡水による止水式飼育の場合(20～30%)より高い値が得られた。

また、飼育水1 m^3 当りの生産量についても、700～1,800尾となり、淡水止水式飼育方式よりも高密度に飼育が可能であった。

しかし、成長については、平均水温が、淡水飼育の場合に比して、若干低かったせいか、全長約4cm、体重約0.5gで、放流用種苗としては、やや小型であった。

また、飼育餌料については、生物餌料からアユ用配合餌料に変えた直後に若干の奇型魚が出現した。今後これらの諸条件を満たすことにより、なお高率的な種苗生産方式が確立されるものと推察された。

* 現 農政部水産課